

「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

吉田 夏彦

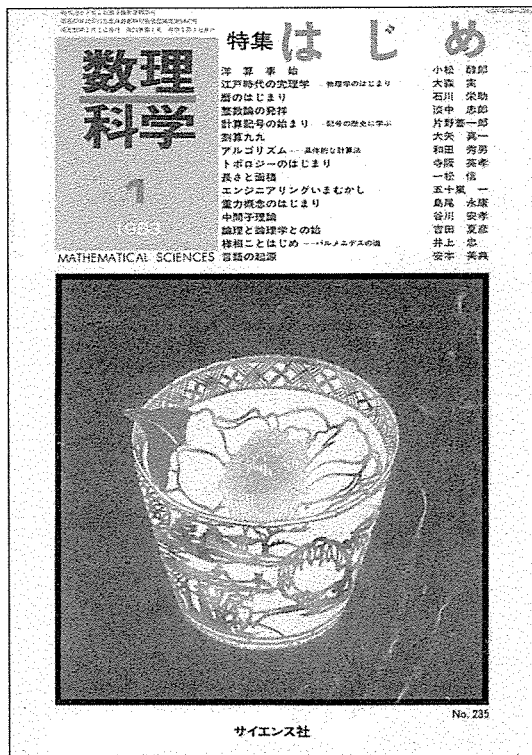
1983年1月号

この30年の間の学問の発展はいちぢるしく、論理学もその例外ではない。しかし、小文の目的は、当時の論理学の状況を概観することではなく、古典に多少言及しながら、論証や論理学の発生について想像を述べることだつたので、論理学の発展には今度もふれないでいいであろう。むしろ、鸚鵡や類人猿に人間の言葉に似たものを使わせる研究が進んだことの方が、論理の発生に将来示唆が得られる希望を与えるものと思われるが、この種の研究の意義をあまり肯定的にみないの方がまだ多いのが現状であるし、肯定するとしても、論証をおこなわせるところまでは研究が進んでいないのだから、こちらの話にもここでは入らない。

かつては、「分類学は、学問の初期の段階で、法則定立の段階になつて初めてほんものの学問になる」などといわれたものだが、小文は、論理学の言葉が、数学や自然科学を分類学として発展させているという主張で終つている。この主張は今でも妥当であると考えている。ただし、博物学的な分類では、五感で得られる経験をそのまま述べた言葉もふんだんに使われるし、そのことの効用も大きいのだが、数理科学的な学問は、基本概念を論理的なものを含む少数のものにかざるといふ禁欲的な態度をとることで新しい分類学となることに成功しているのである。

探査機が送ってくる情報も、この禁欲的な言葉で書かれていると思われるが、その一部は、視覚的な映像に翻訳されてテレビの番組に登場している。文科系の芸術家も、COMPUTERを自由につかひこなして作品を作る世の中である。その時、COMPUTERが「理解」できる言葉は畢竟この禁欲的な言葉だけなのだということはどれだけ意識されているのだろうか。

本誌の読者にとっては、30年前も今も、この禁欲的な言葉は親しいものであろう。しかし、猫も杓子もFORTRANやBASICでPROGRAMMEを書くことを覚えようとはげんだ時代は遠く去り、お仕着せのアプリを楽しむ人が多くなつた今、一般の人々は、黒



子としての活躍の場を着々とひろげてきた論理的な言葉のことはあまり念頭にのぼせなくなつた。めまぐるしく交代している家電や端末の新製品は、いわゆるアナロク的な感性にどンドンすり寄つてきている。

そのことと関係があることなのか、論証に似て非なる言論がますます幅をきかせる傾向が出てきたように思われる。たとえば、感情に訴えて説得する弁論が人気をえている。地上をおおつている暴力沙汰も、この種の弁論にささえられているところがある。こういう世の中では論理の始に思を寄せる人も減つて行くのかも知れない。

(よしだ・なつひこ, 東京工業大学名誉教授)